

## 〈授業担当者〉

【1】前・後期に授業参観を受けた合計回数を教えてください。

被参観回数	0回	1回	2回	3回	4回	5回
回答者数	12名	7名	5名	8名	5名	3名
	6回	7回	8回	9回	10回	20回
	3名	1名	0名	1名	1名	1名

【5】参観者からのフィードバックを授業改善につなげることができましたか。

できた	できなかった	その他
22名	5名	3名

## 〈まとめ〉

参観者からのフィードバックを授業改善につなげられなかった教員についても、参観日が担当する最終回だった等の理由でした。フィードバックによって学生の受講態度が分かって良かったという意見が授業担当者からもありました。客観的な意見や学生による授業評価アンケートとは異なる視点からのアドバイスによって、改善点が明確になったとの意見もありました。

## 【今後の展開】

アンケート結果から、教員間の授業参観は授業改善に有効な手段であると判明しました。今後も継続して実施したいと思います。

自由記述欄には、少数ですが改善点も挙げられていましたので、今後、教員間の授業参観がより多く実施されるよう改善に努めたいと思います。

全学的に授業参観を実施している事例は、全国的にも珍しいものです。今後、授業参観をした後に立場など無関係に授業改善について気軽に話し合うような雰囲気が、醸成されることを期待しています。

## 私の薦める、私の一冊 Column

情報処理教育研究センター 教授 藤原 洋一

岸見一郎・古賀史健 著『嫌われる勇氣』  
ダイヤモンド社(2013)

“すべての悩みは対人関係の悩みである”、“世界はシンプルであり、人生もまたシンプルである”、“トラウマを否定せよ”、“他者の課題を切り捨てよ”、“叱ってはいけない、ほめてもいけない”、“いま、ここを真剣に生きる”など、いずれも本書に登場する言葉の数々です。

「アドラー心理学」を皆さんはご存じでしょうか？ 恥ずかしながら本書を読むまで、ジークムント・フロイト(1856-1939)、カール・グスタフ・ユング(1875-1961)といった心理学の巨匠とは異なり、アルフレッド・アドラー(1870-1937)の存在を私は全く知りませんでした。

本書は「アドラー心理学」を私のような門外漢が理解しやすいように、その思想を「青年と哲人の対話」という形式を用いてまとめられています。そのおかげで通常の心理学書のような理論や専門用語を理解しなければ先へと進めないといったことはなく、最後まで飽きずに読むことができます。

さて、肝心の内容についてですが、1)人のすべての悩みは対人関係の悩みであり、そのゴールは「共同体感覚」である、2)人生の主役は自分自身である、3)人の行動には目的がある(目的論)、4)人はこれ以上分割できない最小単位であり、全体として考える(全体論)、5)人は自分の主観的な世界に住んでいる(認知論)、などが挙げられます。また、“アドラーの考え方が理解できるようになるためには、その人の人生の半分くらいはかかる”ことから、学生の皆さんはともかく、私などは今から20数年かかる計算となり、すべてをすぐに理解できないのは当然なのかもしれません(うまくできています!)。「アドラー心理学」にもう少し触れてみたいという方には小倉広 著の『アルフレッド・アドラー 人生に革命が起きる100の言葉』ダイヤモンド社(2014)をあわせて紹介します。

※本書は入荷次第、図書館内の本誌推薦書コーナーに展示いたします。

